

箱根権現縁起絵巻の世界への誘い

天正 18(1590)年、豊臣秀吉の小田原攻めにより、5代にわたり南関東に覇を唱えた後北条氏(小田原北条氏)は戦国大名としての地位を追われ、歴史のかなたへと去ってゆきました。ここに取り上げる箱根修験の末裔・平井家に伝わった箱根権現縁起絵巻(山北町指定重要文化財)は、天正 10(1582)年、小田原の地で制作された後北条氏の最後のきらめきを放つ貴重な資料です。

箱根権現を物語る二つの縁起絵巻

今も神奈川県足柄下郡箱根町に鎮座する箱根神社は、往古より箱根権現と称され、人々の信仰を集めてきました。箱根神社には、南北朝時代に制作された箱根権現縁起(重要文化財)が所蔵されています。本稿では、こちらを便宜上「箱根神社本」と呼ぶことにします。

箱根神社本には、箱根と伊豆の二所の権現の由来が語られます。箱根神社本はその首尾を欠きませんが、『神道集』という説話集に収められる「二所権現ノ事」を参照しながら、そのあらましを紹介しましょう。

むかし、天竺(インド)の斯羅奈国に源中将という人がいました。ある時、帝王から中将の宝を継ぐ子どもをもうけるよう命じられた源中将は、妻とともに観音菩薩に祈願します。その願いがかなって懐妊、そして姫君が誕生しました。姫君は『妙法蓮華経』(『法華経』)如来寿量品に説かれる偈文のうち、「常在靈鷲山」という一偈にちなみ常在御前と名づけられました。

しかし、常在御前が5歳の時に母は亡くなり、7歳になると新たに継母御前が迎えられました。やがて妹が生まれ、靈鷲御前と名づけられます。常在御前が16歳、靈鷲御前が9歳の時、中将は都へあがり3年間出仕します。その間に中将から常在御前へと贈られる品々を目にした継母御前は、自分の娘よりも常在御前が大切にされていると感じ、嫉妬の念を募らせました。継母御前は常在御前を島に捨てたり、土牢に閉じ込めたりとさまざまに策略をめぐらせますが、その度に常在御前は妹・靈鷲御前に救われ、苦難を乗り越え美しく成長しました。そこでついに継母は山中に穴を掘り、その内に千の剣を立て、常在御前を突き落としてしまいます。後を追ってきた靈鷲御前は、山中から戻る母を目にしますが、母の姿は蛇体へと変じていました。

常在御前が落とされた穴に至った靈鷲御前は悲しみ

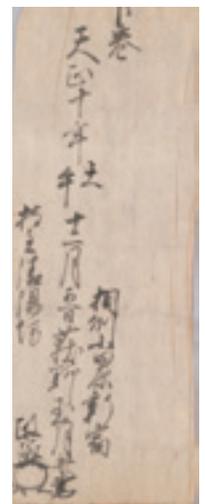
に涙を流していますと、折しも狩りに来ていた波羅奈国の太郎と二郎という二人の王子たちが、その哀しい声に気づき、穴から常在御前を救い出します。そして常在御前と靈鷲御前の姉妹は、波羅奈国の二人の王子の後となって、波羅奈国へと渡ってゆきました。

一方、都での勤めを終え帰館した源中将は、二人の娘の失踪を聞き、深い悲しみに沈み出家しました。中将は諸国行脚の途中、荒廃した古堂の修繕や法華経の功德によって、波羅奈国において娘たちと再会を果たします。そして源中将、常在御前夫婦、靈鷲御前夫婦は、仏法の広まる国・日本へ赴くことにしました。

やがて一行は大磯に至り、高麗寺で箱根山が尊いことを聞き、父・源中将と妹の靈鷲御前は箱根権現として、姉の常在御前は伊豆山権現としてそれぞれ顕現しました。あの継母はというと、あまりの業の深さゆえ、蛇道へと堕ちたと語られます。

このように箱根神社本は、前生譚を詞書と絵によって語り、そして巻末には大磯と箱根の霊地の景観を描いています。箱根神社本の成立の背景には、伊豆と箱根の霊地をめぐる二所詣の存在がありました。二所詣は鎌倉将軍による伊豆・箱根の二所と三嶋社の参詣を始まりとし、やがて庶民にも広がり、中世を通じて流行したといえます。また法華経信仰もこの縁起を支える重要な要素となっています。箱根神社本に描かれる信仰の世界の背後には、法華経信仰にもとづき、伊豆と箱根の二所を修行の場とした宗教者あるいはその集団の存在が考えられています。箱根神社本に描かれた箱根の本地物語(神仏が神仏として顕現する前の物語)の構造は、熊野の本地物語と共通しています。両者の成立にはなんらかの関わりが認められ、その背景には熊野修験の影響を受けた箱根修験の存在があったと想定されています。

さて、この箱根神社本をもとに戦国時代にあらたに制作されたのが、平井家に伝来した箱根権現縁起絵巻です。この絵巻は箱根修験であった「正覚院」の末裔にあたる平井氏の家に伝えられてきました。その来歴を尊重し、本稿では「平井家本」と呼ぶことにします。



【図1】奥書

現在、経年のため絵巻の料紙をつないでいた糊ははがれてしまっていますが、上下二巻で一枚も失うことなく、また鮮やかな彩色を今に伝えています。しかも下巻には、「相州小田原しんしく新宿」「天正十年壬午十一月五日荻野玉月齋書」「政家（花押）」「持主清陽坊」と記された奥書【図1】を有し、制作の年代と環境、関わった人物を知ることができる点は特筆すべきでしょう。

平井家本のあらまはは、先行する箱根神社本と共通点を持ちながらも、いくつかの相違も認められます。特に大きな違いは、父・源中将と姉・常在御前夫婦、妹・霊鷲御前夫婦の一行が日本に渡ったのち、妹・霊鷲御前夫婦は箱根に、姉・常在御前夫婦は伊豆に、父・源中将は三島の神として顕現する点です。そしてこれに呼応するように、巻末では大磯、伊豆、箱根、三嶋の霊地図が、料紙いっぱい描き出されています。なお平井家本では、大蛇となって海を渡り日本にやってきた継母御前が救いを求めたので、箱根権現が箱根神社開創の万巻上人に頼み、一日一夜に祈り出した湖を住处とさせて、「あふきのとう」（扇の頭）の祭りを定めたこと、今も続く芦ノ湖龍神祭の起源譚を語ります。

地獄の存在が強く意識されている点も平井家本の大きな特徴の一つです。たとえば、常在御前の生みの母が亡くなる場面（上巻第4段）【図2】では、地獄からの使者が源中将の館にやってきました。さらに、後述するように、巻末に描かれる箱根も、地獄を含む霊地として表現されています。

平井家本は、表現の面においても箱根神社本の単なる写しにとどまりません。箱根神社本が天竺・ス羅奈国の建築や風俗を和様で表すのに対し、平井家本では異国の舞台にふさわしく唐様に描いています。加えて、絵の中にセリフや登場人物名を書き入れる画中詞を多用し、詞書に対応した場面の絵も平明で、分かりやすく親しみある表現になっています。

霊地に描かれたモチーフ

平井家本の詞書は次のような戒めで結ばれます。「この縁起を一度聴聞することは、費用をかけて伊豆・箱根・三嶋の三山を参詣するより功德があり、世間現世安穩、一切衆生の願いが叶う。地獄は、一に箱根権現、二に伊豆大権現、三に三嶋大明神である。くれぐれもこの縁起を不浄の場所で読んでほならない。この縁起を読むときには心身を清らかにして一心専念して聴聞すべきである」と。その後、父・源中将と姉・常在御前夫婦、妹・霊鷲御前夫婦の一行が上陸した大磯を堂々



【図2】常在御前の母が亡くなる場面（上巻第4段）

たる高麗山と人々が往来する宿場町とともに描き、続いて三つの霊地——伊豆山走湯大権現、箱根権現、三嶋大明神を表します。

この三山の図は、神々の因縁をひく聖域でありながら、縁起を目にする人にとって、なじみある景観として描いているように思われます。霊地の堂舎やそこに祀られる諸像、参詣路を行き交う人物などは、情報を細かく描き込む部分と省略する部分とを織り交ぜながら表現しています。個々のモチーフの図像的な描き分けは比較的ゆるやかで、全体として明るく親しみがあり、にぎやかな雰囲気画面にとどめます。

研究者たちは平井家本の諸モチーフを、他の寺社を描く複数の絵画と比較することで、平井家本の制作工程を明らかにしてきました。ここでは先学の研究に導かれながら、三山図を順にみていきましょう。

伊豆山走湯大権現【図3】は画面の左右と上部に山と雲を配置し、あたかも霊地を囲むフレームのような構図です。画面左上には、岩山の背後に本宮社を配置し、下宮のにぎわいと対照をなしています。画面下部は海で、海岸沿いの街道には湯屋が並びます。また、海に向かって噴き出す「走り湯」とそれを利用した露天風呂、そこで沐浴する人々の姿が描かれ、伊豆の霊地の特徴をよく表しています。詞書には「湯に入ろうとする時は、『観世音示現、走湯如大海、沐浴衆生、直生極楽』と三度唱えて入れば、過去・現在・未来まで成仏することができる」と記されています。さらに、箱根修験で用いられていたと考えられる同時代の二所三嶋参詣の資料である『佛神一体灌頂鈔付二所三嶋参詣』には、「『走湯如大海、示現観世音、沐浴衆生、離苦得安楽』という偈頌は、走湯権現の功德で、役行者に告げられた託宣である」とあり、平井家本との関係が指摘されています。と、すれば、画面左下の関の傍らの堂【図4】に祀られている、被帽で錫杖らしき物を執る像は役行者像とみてよいでしょう。



【図3】伊豆山走湯大権現



【図5】箱根権現



【図6】三嶋大明神

次に箱根山の図【図5】をみましょう。中央に「箱根大権」とその名を記したこの霊地図は、芦ノ湖の湖畔から湖を隔てて、本宮をはじめとする社殿が立ち並ぶ景観を捉えています。箱根神社本にも箱根権現の社域は描かれますが、平井家本の構図は、箱根神社本よりも『善信聖人絵』下巻第4段（西本願寺所蔵）に近く、箱根山表現の別系統の形式を選択したとみられます。芦ノ湖や五輪塔、二つの釜といった箱根山と因縁の深いモチーフが参詣路上に配置され、道中の関所では参詣者が門番に通行を願う様子が描かれます。関所を越え、道は折れ曲がりながら画面上方の本宮へと続いてゆきます。伊豆山では本宮は山の背後に置かれ、参詣者の姿は描かれませんでした。箱根山では二人



【図4】図3部分（左下）拡大図

の参詣者が向かっています。

注目すべきは、箱根山の一面には地獄が描かれている点です。これは伊豆山や三嶋大明神の図にはなく、詞書にある「地獄は一に箱根権現」という三山の地獄の序列を視覚的に反映し、箱根権現の特別な地位を示すものと考えられています。社域と地獄を隔てる岩山の山肌には鋭く短い墨の線を重ねてその質感を表現しており、ほかの山々とは異なる厳しい印象を与えています。山中の地獄には、剥ぎ取った衣で罪の重さをはかる奪衣婆や、生前の悪行を見抜く浄波璃の鏡、そして女人が墮ちる血の池地獄【表紙参照】が、目連の母の救済譚（目連が神通力で地獄に墮ちた母を探し出して救済した）とともに描かれています。ここで、大蛇となった継母を救い、芦ノ湖を住处とし、祭りを定めたという箱根権現の物語を思い起こさずにはいられません。箱根権現の霊地図は、箱根山が女人救済の霊地であることを雄弁に物語っています。

三嶋大明神【図6】は二紙を継いで社殿が描かれます。右から鳥居、二つの橋が連続して、社殿へとつながる社頭図は、『一遍聖絵』第6巻第2段（清浄光寺所蔵）にもみられ、

様式化が認められますが、平井家本においては右向きの社殿は絵巻の最後にあたり、おさまりのよい構図となっています。境内、平橋、反橋、鳥居の下には、烏帽子姿で上は白、下は青の浄衣を身につける神官が繰り返して描かれているのが特徴的です。また境内に多くの鳥類がつがい、あるいは単独で配置されているのもユニークです。『一遍聖絵』にも、烏帽子を着けた白い浄衣姿の人物が、平井家本と同じような位置に複数描かれることから、平井家本の制作工程として先行する絵画作例に登場する人物を、動きや構図を変えながら取り入れて再構成したと想定する見方があります。二つの橋が架かる池で遊ぶ2羽の白鳥についても、『一遍聖絵』とのモチーフの近縁性が指摘されています。

それでも三嶋社の境内に26羽もの鳥を、しかも人の背丈ほどに強調して描いているのは示唆的です。つがいで描かれる鳥の姿を夫婦の愛情の象徴と捉え、姉妹の神の前生譚や母の救済、箱根山の霊地図を踏まえて、平井家本が女性を主たる対象として夫婦間の和合を説いて完結すると読む説があります。一方で、三嶋社の主要な神事が4月・8月・11月の「中西」の日の祭祀に行われていることに着目し、祝祭的空間の視覚的演出と解釈する見方も示されています。いずれも魅力的な説であり、今後の研究の進展によって、さらに新たな読み方が提示されることもあるでしょう。

箱根修験

巻末に神々が顕れた三つの霊地を描くのは、箱根神社本にはみられない平井家本の特色です。こうした構想の背景には、「熊野の本地」絵巻の影響が想定されています。

この「熊野の本地」の物語と箱根権現縁起の物語が、構造的に共通していることはすでに述べましたが、「熊野の本地」絵巻では、熊野の神々の由来を語り描いたうえで、巻末に熊野本宮・新宮・那智の社頭図を配しています。また熊野の三山のうち那智を単独で描いた那智参詣曼荼羅は、熊野観心十界曼荼羅とともに、近世には絵解きに用いる掛幅装の絵画として、熊野山伏や熊野比丘尼によって全国に広められたとされます。三山図にとどまらず、これらの絵画と平井家本の箱根山の霊地図との間には、図像上の共通性があることが指摘されてきました。たとえば、箱根山の関所に描かれた門番と旅人のモチーフは、那智参詣曼荼羅において典型的な関所の表現です。また地獄にみる血の池地獄と目連の母救済譚の表現は、熊野観心十界曼荼羅のそれと近いといわれます。

こうした共通性から、平井家本は三山図を備える本地物語絵巻としての構想を「熊野の本地」およびその絵巻にならい、さらに熊野山伏や比丘尼が勧進唱導に用いた那智参詣曼荼羅や熊野観心十界図の図像を取り入れながら、東国の三山として本地物語絵巻を、箱根神社本の単なる写しではなく、再創造したものと考えられています。そして、その制作と使用の背景には、箱根修験の勧進、教化という目的があったとする見解が現在では定説となっています。

あわせて後北条氏の霊地復興の動き（早雲の伊豆走湯権現の造営、氏綱の箱根権現、三嶋大明神の社壇復興など）や、関東八カ国の掌握を目指す動向、そして後北条氏を後ろ盾とした箱根修験の活動を、平井家本の再創造の背景として位置づける指摘もきわめて重要

でしょう。

次世代につなぐ

平井家本の奥書からは、「小田原新宿」において「荻野玉月斎政家」という人物が詞書を記していたことがわかります。その筆跡から、画中詞も同じ人物の手になる可能性が高いと考えられています。しかしながら小田原新宿にいた荻野玉月斎政家が、いかなる人物であったのかについては現時点では詳らかではありません。

また、平井家本の絵を手掛けた人物についても、その画風から地方の画師を想定できるものの、詳しいことは明らかではありません。実際、天文元（1532）年から同9（1540）年かけて、9年にも及ぶ北条氏綱による鎌倉・鶴岡八幡宮の再造営事業に参加した職人の中には、「殊牧」や「森村」といった画師の名が残っているといます。さらに、16世紀には小田原城下において、狩野派一派の存在が確認できることも知られています。しかしこうした画師や絵画制作の動向を、平井家本の制作と直接結び付けることはできず、この点についても、今後の研究の進展が待たれます。

二所三嶋の神々の物語と、因縁の霊地を描き記した平井家本は、その背後に広がる後北条氏の時代の信仰や文化のありようを、静かに語っています。その声に、より多くの人々が耳を傾け、そこに込められた歴史をすくい取ることができるよう、わたしたちはこの平井家本を次の世代へとつないでゆかなければなりません。

（任期付学芸員・樋口 美咲）

参考文献

- ・神奈川県立歴史博物館『後北条氏と東国文化』展覧会図録、1989年10月
- ・阿部美香「箱根・伊豆山・三島の縁起とその世界」『悠久』94、鶴岡八幡宮悠久事務局、2003年7月
- ・古川元也「箱根権現縁起絵巻の概要」『山北町指定重要文化財箱根権現縁起絵巻（山北町文化財調査報告書）』山北町教育委員会編、山北町教育委員会、2004年2月
- ・古川元也「山北町指定重要文化財「箱根権現縁起絵巻」について」『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』30、神奈川県立歴史博物館、2004年3月
- ・阿部美香「本地物語の変貌—箱根権現縁起絵巻をめぐる—」『中世文学』49、2004年6月
- ・山北町編『山北町史』通史編、2006年3月
- ・阿部美香「翻刻紹介『佛神一鉢灌頂鈔』」『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』15、昭和女子大学大学院生活機構研究科、2006年3月
- ・阿部美香『箱根権現縁起絵巻』と後北条氏の修験文化『修験道の室町文化』川崎剛志編、岩田書院、2011年6月
- ・阿部美香『箱根権現縁起絵巻』の再創造—描かれた霊地』『文化創造の図像学 日本の宗教空間と身体』（アジア遊学154）阿部泰郎編、勉誠出版、2012年6月

2025年までの神奈川県のお像彫刻調査私見

彫刻の^{しっかい}悉皆調査

当館の彫刻担当学芸員の主な仕事の一つに県内所在の彫刻（主に仏像・神像・肖像彫刻）の調査研究があります。国の国宝・重要文化財に指定されているようなすでに評価の定まった仏像を調査対象にすることもあれば、まだ世に知られず評価が定まっていない仏像を取り扱うこともあります。

後者の最も基礎的な調査方法は悉皆調査です。悉皆調査とは、ある自治体内に所在する近世以前の仏像（主に木造）をできるかぎり調査することで、大体1軀ごとに調書を作成し、記録写真を撮影します。さながら仏像の戸籍を作成するようなものです。調書には像高だけでなく、顔の幅や腹の奥行など細かい法量^{ほうりょう}を計測します。記録写真も、持ち運びのできる背景紙や照明を用いて調査場所で簡易的な写真スタジオをつくり、なるべく高精細の画像が撮影できるカメラを三脚に設置して撮影します。

調査後それらの記録をまとめ、調査報告書を作成します。調査報告書には、すべての彫刻の画像と簡単な説明（名称、員数、製作年代、所蔵者）を付し、重要な作例については側面や背面、像底等の写真カットを掲載し、より詳しい説明を付けます。

自治体によっては100を超える寺社を有するところもあり、自治体の文化財担当の職員や地域の歴史に詳しい方々の協力を仰ぐことが多いです。彫刻の調査自体も一人では作業量が多く、時間がどうしてもかかります。等身を越える仏像は一人では動かすことができず、十二神将像や十王像などの構成軀数が多い仏像は一人で作業をすると膨大な時間がかかってしまいます。そこで、彫刻の悉皆調査では複数の彫刻史研究者や文化財を専門に撮影するカメラマンが関わり、調査を行うことが多いのです。

悉皆調査は一見地味で手間のかかる調査ですが、どこにどのような仏像があるのかを端的に把握することができます。さらに、まれに製作に関わる墨書が見つかることで地域の歴史の一部が判明したり、これまでに全く知られていない平安時代や鎌倉時代に遡る貴重な作例に出会うこともあるのです。そのため、宝探しのような昂揚感を感じることも少なくありません。

調査報告書が刊行されればそれで終わりということ

ではありません。市民向けの講座や現地見学会を開いて、地域の方々に身近な仏像への理解を深めてもらうきっかけを提供します。また、博物館等での特別展への出品、文化財指定の候補になることもあります。

そして、不測の事態が起こった時にこそ、悉皆調査の調書や画像データが役に立ちます。近年、全国的に仏像の盗難事件が相次いでおり、インターネットのオークションサイトへの出品や古美術商で売却されるケースがあります。その際に、悉皆調査時に得られた画像データや像高等の情報から盗品であることが判明し、盗まれた仏像が所蔵者のもとに帰ってきた例があるのです。

彫刻調査の状況

● 1960年頃～2014年まで

神奈川県内には33の市町村があり、そのうち30市町の彫刻資料に関するなんらかの報告書・資料紹介が刊行されています（2026年1月現在）。彫刻悉皆調査やそれに準じるような調査を実施している神奈川県内の自治体は8～9割をしめます。他の都道府県と比較しても、実施している割合はかなり高いと思われます。

県内の仏像調査は、当館の開館以前には、鎌倉国宝館館長で神奈川県文化財専門委員であった渋江二郎氏が主導し、悉皆調査に近いものでは葉山町、箱根町、南足柄町等の調査報告が刊行されています。1967年の神奈川県立博物館開館以後は、学芸員として勤務した清水眞澄、薄井和男、塩澤寛樹の各氏がそのほとんどに関わり、青山学院大学の三山進氏、鎌倉国宝館の山田泰弘氏らが中心的な役割を担っていました。1985年頃までの調査状況については、薄井和男氏の「神奈川県下における仏像調査の現況」（『かながわ文化財』81、1985年3月）が詳しいです。この時までには彫刻調査を実施した、もしくは実施中であった自治体を掲載順に記述すると、逗子市、鎌倉市、横浜市、横須賀市、茅ヶ崎市、秦野市、平塚市、伊勢原市、川崎市、藤沢市、南足柄市、相模原市、大磯町、二宮町、箱根町、湯河原町の16市町です。1985年から2014年までの30年間には、小田原市、厚木市、大和市、海老名市、綾瀬市、寒川町、大井町、山北町、愛川町、藤野町（現相模原市緑区）、相模湖町（同）の11市町（うち2町は相模原市と合併）の調査が実施されました。

● 2015年～2025年まで

2015年から2025年までの11年間では、津久井町(現相模原市緑区)と松田町の2町の調査が行われました。2015年は私が当館に着任した年です。悉皆調査や自治体史に関わる彫刻調査は、1990年代の経済状況の悪化により、2000年代に入ると財政難等で実施する自治体が少なくなりました。

津久井町での調査は、町史編さん事業として行われました。調査時にはすでに相模原市と合併し同市緑区となっていました。旧町域を対象として調査が進められました。私が調査員として神奈川県の悉皆調査に携わったはじめての例です。前述のように、相模原市と合併をした藤野町と相模湖町の調査報告書は刊行されており、旧相模原市域を対象とした調査報告書も刊行されていました。

調査は2016年から2017年にかけて行われました。その時の調書をまとめたファイルが手元にあります。その調書をもとに薄井和男氏と町史の原稿を分担して執筆したものが『津久井町史 文化遺産編』(相模原市、2018年3月)に「彫刻(仏像・神像)」として掲載されています。町史という性格上、一般の読者を想定し、専門的な調査報告書というよりは特徴的な仏像を取り上げて解説を付す形となっているため、調査をしたすべての仏像を掲載できたわけではありません。また、ちょうど2020年に相模川流域の仏像をテーマにした特別展「相模川流域のみほとけ」を計画しており、調査をした仏像の中から7軀を拝借することができました。

松田町での悉皆調査は、延命寺での調査をきっかけに、2023年の特別展「足柄の仏像」に松田町の仏像を4軀拝借したところから実施する方向になりました。科学研究費による調査として、松田町教育委員会、文化財保護委員の方々にご尽力いただきながら約1年をかけて行いました。この調査で、松田町の仏像のなかで最も古い鎌倉時代前期の谷津薬師堂の薬師

如来坐像を確認できたことは大きな成果です。延命寺には同寺を開山した一字宗箇いちじゅうしゆんこの等身の肖像彫刻が確認できました。15世紀末から16世紀初頭に造られたとみられ、存命中に造られた寿像の可能性もある貴重な作例です。調査を行った仏像のデータをまとめた調査報



【図】『松田町の仏像』

告書を作成しました(神野祐太編『松田町の仏像』、松田町教育委員会、2025年3月【図】)。詳しくは同書を参照してください。

本調査で興味深かったことは、江戸時代後期の地誌『新編相模国風土記稿』に記される仏像がかなり多く現存していることです。明治時代初頭の廃仏毀釈はいぶつきしやくの影響で廃寺になってしまった寺院の仏像も近所の別の寺院に移動しているケースが多く、全く行方がわからなかったのは、3か寺分くらいでした。一方、地元の方に話をうかがうと、昭和初期には存在したけれども、その後の行方がわからないというケースもありました。

今後に向けて

悉皆調査が終了した自治体であっても、さまざまな理由で調査ができなかった寺社や仏像・神像が少なからず存在するため、定期的に追加調査・再調査が実施されています。さらに、悉皆調査が盛んに行われていた1980年代～1990年代からはすでに30～40年あまりが経っており、その間に彫刻史研究も進み、評価も変化しています。二巡目の悉皆調査をする必要性も高まっています。

最後に、残る7市町村について概観しておきます。三浦市、座間市、葉山町、中井町では自治体内の彫刻を紹介した書籍等が刊行されています。しかし、網羅的に調査された悉皆調査ではなく、市町の指定文化財の紹介にとどまるものもあります。開成町、真鶴町、清川村には、彫刻に関するまとまった報告はありません。これらの町に彫刻が全く存在していないということではなく、寺院があればそこには仏像が安置されているはずで、わずかながらに知られている仏像を挙げれば、開成町には町指定文化財として円通寺の十一面観音菩薩立像が知られ、真鶴町は如来寺跡の石仏群が有名です。清川村の正住寺不動明王及び両脇侍像については、『厚木市史 中世資料編』(厚木市、1989年)に詳細が掲載されています。

これらの市町村での調査は、どのような形であれ少しずつ進めていきたいと考えています。盗難や災害が非日常ではなくなってきた昨今の状況や、人口減少によって信仰する人や管理する人がいなくなり忘れ去られてしまうリスクが潜在することに大きな危機感を抱いています。できるだけ早く一か所でも多くの調査を進めていきたいです。

(主任学芸員・神野 祐太)

本稿は JSPS 科研費 JP22K00173 の助成を受けたものです。



県博はただいま休館中
2026年9月までの予定



催し物情報

	日程	催し物	講師	〆切
事前申込・抽選制	4/22 (水)	現地見学会「住まいから見た先史時代」☆	橋口 豊 氏 (横浜市歴史博物館学芸員) 佐藤 兼理 (当館学芸員)	4/8 (水)
	5/8 (金)	現地見学会「矢倉沢関所を歩く」	寺西 明子 (当館学芸員) 根本 佐智子 (当館非常勤学芸員)	4/15 (水)
	5/15 (金)	館長トーク「家康の新田開発 県内現存最古の灌漑用水～ニヶ領用水～」	望月 一樹 (当館館長)	4/22 (水)
	5/21 (木)	講演会「幕末知識人の「開国」認識」	嶋村 元宏 (当館主任学芸員)	4/30 (木)
	6/20 (土)	講演会「海を渡った寄木細工」	鈴木 愛乃 (当館学芸員)	5/27 (水)

☆横浜市歴史博物館との共催。

受講料 : 全て無料 (行事により移動交通費等がかかる場合があります。)

申込方法 : HP の催し物案内「申込みフォーム」または「往復はがき*」(*4/22 (水)・5/8 (金) の現地見学会を除く) に行事名・開催日・郵便番号・住所・氏名 (ふりがな)・電話番号を全て明記してお申し込みください。往復はがきは1行事につき1通、最大4名まで同時申込み可です (全員の氏名を明記)。締切日必着でお送りください。

申込先 : 神奈川県立歴史博物館 企画普及課 (住所は下記参照)

会場 : 詳細は当館 HP をご確認ください。

※会場への直接の問合せはご遠慮ください。

※同一人からの複数の申込みは1件として扱います。

※記載事項に不備があると受付できない場合があります。

※内容は変更になる場合があります。詳細は HP でご確認ください。



パンチの守からのご報告 ～ 2025 年の催し物振り返り

休館中の 2025 年 1 月～ 12 月は、35 件もの講演会や講座などを開催したぞ！ 延べ 1500 人を超える方々にご参加いただき、ありがたいかぎりじゃ。あらためて御礼申し上げる。

2025 年は建物工事のためこれまで会場だった当館講堂が使えず、県内各地の外部会場をお借りしての開催じゃった。他館・他機関との連携講座も多かったのう。県央・県西部開催の催し物には、ふだんは県博まで遠くて足を運びづらいという御仁にもご参加いただき、お初にお目にかかる方々も多く、ワターシもうれしかったのじゃ。

2026 年もたくさんの皆様にお会いできることを、職員一同楽しみにしておるぞ！



当館キャラクター
営業部長・パンチの守

発行：神奈川県立歴史博物館 <https://ch.kanagawa-museum.jp/> X・instagram @kanagawa_museum

〒231-0006 神奈川県横浜市中区南仲通 5-60 TEL 045-201-0926 FAX 045-201-7364

発行日：令和 8 年 2 月 17 日 印刷：株式会社 TAKT・JAPAN

※本誌画像の無断転載を禁じます

